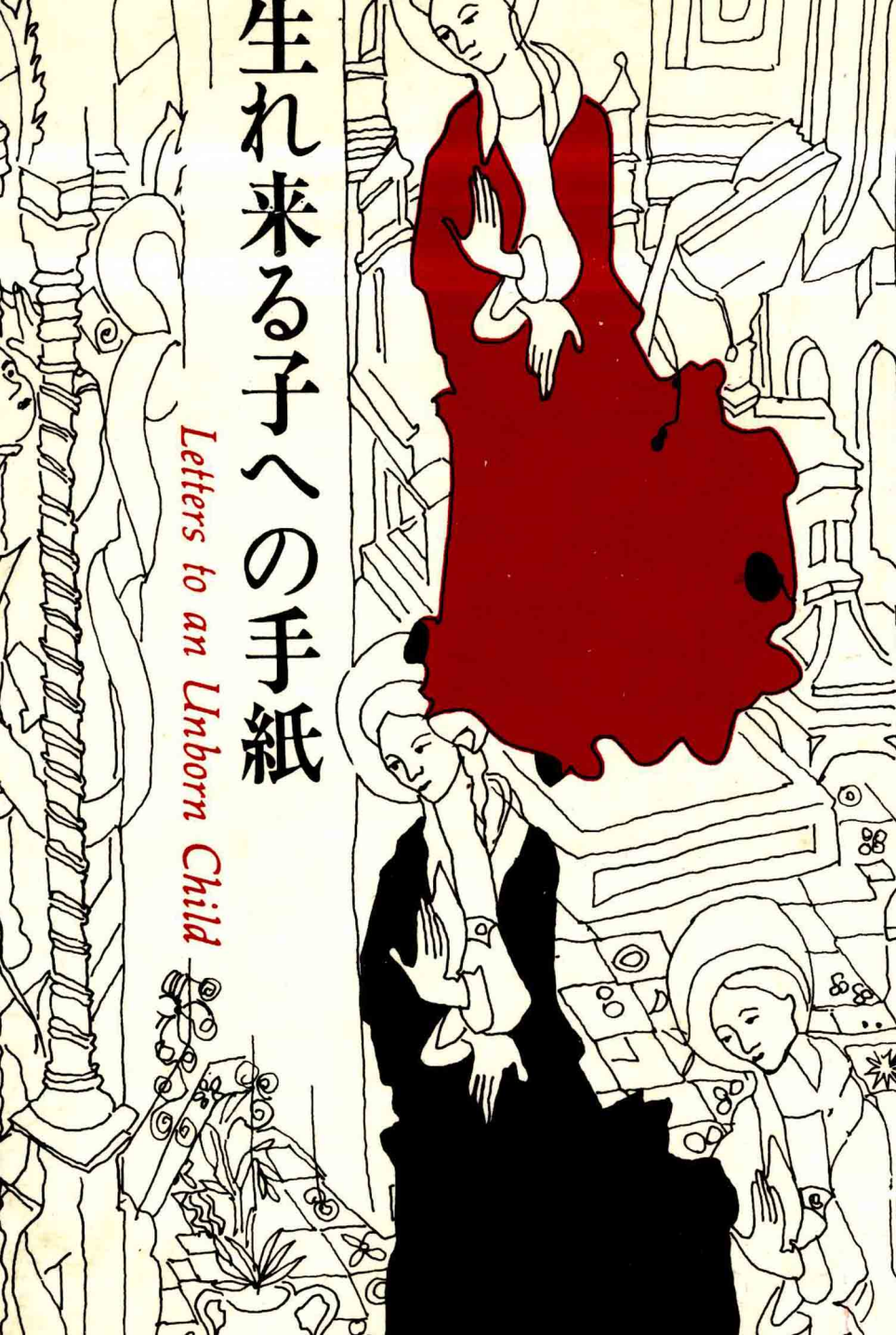


生れ来る子への手紙

Letters to an Unborn Child





デヴィッド・アイアランド ● 上杉明訳
生れ来る子への手紙

Letters to an Unborn Child.

訳者紹介

1974年明治大学院修了

明治大学他 講師.

訳書 H. ジェイムズ『ヨーロッパの人』

G. K. チェスタトン『正気と狂気の間』他

Letters to an Unborn Child. ©1974

by David E. Ireland and Louis B. Tharp, Jr.

Harper & Row, Publishers

Japanese translation rights arranged through UNI Agency.

Tokyo.

生れ来る子への手紙 ©デヴィッド・アイアランド

訳者・上杉明

発行者・田中弘吉

発行所・春秋社 〒101東京都千代田区外神田2-18-6

電話 03-255-9611 振替東京 8-24861

〈育英印刷・小林製本〉

1978年 3月31日 第1刷発行

¥1000

1978年 4月30日 第2刷発行

はじめに

この本のもとなつたテープは、本来、そのときにはまだ生まれていなかったわが子に聞かせるつもりのものでした。神経障害のため自分の命の長くないのを知つた私は、これまでの人生の闘いの中で得た考え、感情、知恵などを、どうしても後に残したいと思つたのです。それを聞くわが子は、いつの日か私という人間を知ってくれるだろう、そう考えたのです。

ある日の夕べ、私は私の古い友人ルー・サープに、私の胸にあるこの計画を打ち明けてみました。彼は、私の子だけが読む原稿、たった一部であるはずの原稿を準備するのを手伝つてやろうといつてくれました。この原稿を本にしてみたらどうかと思いついたのは、それから三週間もして、最初のテープを吹きこもうとした直前のことでした。ルーは、私が肉体的にできないことのすべてをやってくれました。心の奥底にあるいろんな考えを私が言うがままに聞きとり、余分なところを削り、順序だててまとめるために、それは無限

ともいえるほどの長い時間をつぎこんでくれたのです。この本の中身は、ごく一部を除いて、私の子の生まれる前にすでにテープに吹きこまれたものです。

さて、これから読んでいただくものはすべて、まったくの事実そのものです。こんな個人的な記録をひとさまのお目にかけるのも、ひょっとしたらこれもひとさまのお役に立つことがあるかもしれない、いやそうあって欲しい、と思う私のひそかな願いからにすぎません。

一九七四年三月二十九日

デヴィッド・アイアランド

生れ来る子への手紙 目次

はじめに

手紙1 生まれでる日まで 五

手紙2 愛するということ 一七

手紙3 一家の支えとなること 三五

手紙4 夫となること 五二

手紙5 頑張るということ 五三

手紙6 生まれながらの権利 一〇三

手紙7 自分自身になること 一〇九

手紙8 だれかの友になること 一三三

手紙9 笑うことを知る 一四三

手紙10 泣くことを知る 一六二

手紙11 神の子となる 一八九

手紙12 ほのかな見通し 二二七

手紙13 死に向かって 二四九

原注 二五九

訳者あとがき 二六〇

生れ来る子への手紙

装幀・カット
三田 恭子

手紙 1

生まれでる日まで

まだ生まれていない、私のひとりっ子へ！

私がおまえの父さんだ。まだ生まれていもしない子どもに手紙を書くなんて、へんな父さんだね。でもね、私はふつうの父親じゃないのだ。おまえをこの世に迎えるいろんな事情が、ふつうとちがうのだ。父さんがおまえといっしょに暮らすことがあるにしても、それもおそらくふつうとちがったものになるかもしれない。そのわけは、父さんには死が早く来るから、いつ死ぬかわからないからだ。

おまえは、きっと父さんのひとりっ子になるだろう。よその家のお父さんたちが長い一生をかけて、たいしたことではなくても毎日毎日なにかしら愛情をあらわすこと、たとえば肩車にのせたり、誕生パーティを開いたりしていくことを、私はおまえに言葉でしかしてやれない。父さんはそういう運命になっている。父さんがあと生きられる時間は、ふつ



うよりずっと短い。だから、よそのお父さんたちが子どもにしてやるなんでもないことが、父さんには難しいのだ。

いま父さんにできるのは、こうしておまえに手紙を書くことだけだ。それを読んでおまえがおまえの父さんを知ってくれたらと思う。この手紙を、できることなら本にしたいと考えているのだよ。ほかに父親のない子がいてこれを読めば、その子の父さんが言いたくても言えずに終わったことをわかってくれるかもしれないからね。また、ある子のお父さんは、生きてはいても気持ちを示すのをためらって胸の中の言葉を子どもたちに言えないでいるかもしれない。この本が、そんなお父さんたちの口代りになればいいとも思っている。でも、この手紙は、おまえだけのものだ。父さんからおまえに送る手紙だ。ほかにだれも読んでくれなくても、それで十分なのだ。そうだ、これらの手紙はおまえと父さんのもの、ほかの人たちが読むにしたって、私たちの肩越しに読むようなものだね。

おまえは父さんの手紙を読んでいくうち、ある所はやさしいが、ときには難しくて訳がわからないと思うかもしれない。おとなの言葉をむりして子どもの言葉に変えようとしなかったこともあるからね。おまえが大きくなって、いま書いていることを、もっとはっきり理解できる日がいつかは来るだろう。けれどその日が来ても、おまえはやはり私の息子であり娘であって、私の子どもであることに変わりはない。そして、おまえの父さんをも

つとよく理解できるほどに成長していることだろう。

さて、どうやって話を始めようか？ おまえの父親が、どんな人間か知ってもらうために、どこから始めたらいいのだろうか。いま、こうして坐っていると、一九五九年十二月のことが電光のように胸に思い浮かぶ。当時、父さんは、ノース・キャロライナ大学院の学生で数学を研究していた。あれは、ちょうど後期の授業が始まるころだった。私の父は、必ず半年にいちど、私が神経外科医の診察を受けるよう、手はずをとのえてくれていた。父さんは、脊髓空洞症というめずらしい神経障害に悩まされていたのだよ。はじめてこの病気だと言われたのは、父さんが十六歳のときだった。右手にかなしびれが始まっていた。六か月ごとに診^みてもらうために、その外科医の先生を訪ねることになっていた。お医者さんは、私に診察室を行ったり来たりして歩かせたり、手を上げて鼻の先に触ってみろと言ったりした。そういう診察の仕方はいつも同じで、左右に視線を向けさせては眼の動きを観察し、ご自分の手を強く押させて私の両腕の力を試してみるといふふうだった。ひととおり診察が終わると、「さあ、元気にやりたまえ」と背中を軽くたたいて、見送られた。それが、いつもの決まった順序だった。

しかし、十二月のあの日はちがっていた。その日父さんは、父さんのそれまでの人生で一番の大きな危機と向き合ったのだよ。父さんは、車をひとりで運転して行ったのを覚え

ている。細かな雪がチラついて、あたりいったいには、クリスマス気分がいっぱいだった。父さんは、「サンタさん、クリスマスには彼女をぼくのお嫁さんに！」という、かわいい歌をハミングしていた。

最初の診断を受けてから六年の間に、病状は悪化して右腕は前ほど利^きかなくなり、右足のびっこがわずかながら目だちはじめていた。その日も、雪でおおわれた階段を気をつけながら上り、診察を待った。お医者さんの自宅も兼ねたその医院は、美しい二階建てで、パークサイド・ドライブに面していた。そこはニューヨークのロチェスターという、父さんがまだ両親といっしょに住んでいた所だ。窓からは、庭園に囲まれたテニスコートが見えた。夏など、この先生はよく患者を庭につれだして、バラの花を得意げに見せたりしていた。父さんの名が呼ばれて、奥の部屋の、もうなじみになった椅子に腰をおろした。やっと先生が入って来た。先生は、立って部屋の向こう端まで歩いてみるようにと命じられた。これはもうすでに父さんがなん度もやらされたことだった。

だが、その日は特別な日だったのだ。父さんは、結婚したいと思う女の子に出会っていた。父さんは彼女に恋をしており、彼女もおなじ気持を持ってくれていた。それは、父さんのそれまでの短い人生でめったにない経験であり、父さんはそのことを医者にも話して、いっしょに喜んでもらいたい気持でいた。そして、父さんは胸の中で、こんなふうに思っ

ていたのだよ、「この先生も、きつとぼくを自慢に思ってくれるだろう。体に欠陥があるのに大学の四年を終え、いまは大学院にすすみ、しかも愛してくれる女性まで見つけたんだから！」

診察室の向こうまで歩きながら、父さんは言った。「先生、お話したいことがあるんです。」

「なんだね？」患者の足にじつと目をとめたまま、医者は言った。

「ぼく、結婚するつもりです。」

父さんが部屋の前まで行きつかぬうちに、彼は不意に言った。「そんなこと忘れちゃまいなさい。」

彼の声にもった響きを一瞬判じかねて、「ご冗談でしょう？」と父さんはふりかえった。

医者は私の顔をまっすぐ指さして言った。「冗談ではないよ！」

「でも、どうしてです？」

それに対する彼の答は、父さんの耳に大砲のように響いた。「馬鹿なまねはよしたまえ！ きみは、二十八になるまでには完全な病人だよ。歩くことだって満足にできはしない。運転もむりだ。子どもはできるかもしれないが、養うことはできない。そうなったらい

「いたい、どうするつもりだね？」

父さんの心は、ぐるぐると渦を巻いて闇の中にひきずりこまれていった。このときほどのショックを、父さんはまだ受けたことがなかった。胸がこみ上げてきて、言葉がでなかった。診察が終わると、挨拶もうわの空で医院をでた。車に戻る道の雪は深かった。空は刻一刻暗さをまして、吹雪になりそうだった。しかし父さんには、そんなことはどうでもよかった。

たったいま話にだしたばかりの女の子ジョイスに会うため、父さんは道を急いだ。ジョイス・ロサマンというのが彼女の名前だ。彼女はまちにでていたから、そこで落ち合い、家まで車で送るつもりだったのだ。彼女を拾う所までどのようなようにして運転して行ったのか覚えていない。あの日の午後彼女に会ったことすら、ぼやけている。記憶にあるのは、フロントガラスに吹きつける雪と、耳から去らないお医者言葉だけだ。

ジョイスは車に入るとすぐ、なにかがあったことを感じとって、「どうしたの？」と聞いた。父さんは話した。彼女は、そんなことなんでもないというような素振りをしたが、父さんの気持は軽くなかった。彼女と結婚を望む権利が自分にあるかどうか、それを決めることに重大な責任を感じていた。それはまさしく私の決めるべきことだった。なぜなら、私は夫になるのであり、彼女の必要とするものを満たしてやる責任があるのだから。

日暮れまでに、雪は窓ガラスをおおいつくし、まるで吹雪の衝撃から華奢なガラスを守っているかのようだった。父さんは暖炉の前に坐っていた。半分燃えつきた薪の芯に、炎が深くくいこんで、ばりばりと崩れていくのをじっとみつめていた。悲しみもなにもなかった。すべてが麻痺していた。

母が気づいて、「なにか困ったことができたの？」とたずねた。心配^げ気にじっと見つめて。

「いいえ、ぼくはなにも」とその質問をかわそうとした。

しかしお母さんはあきらめなかった。首を垂れ、長椅子に沈んでいる息子のそばに腰をおろした母の姿は、いまでもはつきり思い浮かべることができる。

「なんなの？」

私は顔を伏せているだけで、なにも言えなかった。

「お医者さんね、そうでしょう？ 先生が……あんたになにか言ったのね？」お母さんはやさしく、私の口を開かせようとした。

私はついに、その日あったことをポツポツ話した。話の区切りごとに、涙が流れて足もとのカーペットに吸われていった。

お母さんはその時はじめて、それまで私に隠していたことを話してくれた。「デヴィッ

ド、あんたはとも大学に行きたがったわね。それで、父さんとわたしは、お医者さんに聞いてみたの。するとお医者さんは、絶対にいけない、それは病勢を早めるだけだ、この病氣と闘うためには家族とともにあるという氣持の支えが必要だ、っておっしゃったわ。」大学にやるために家を離れさせるべきかどうか、母と父は決めかねて心を砕いていたのだよ。ゆつくりと体を麻痺させる病氣におかされた子を、たったひとりで旅立たせる親の心配だ。

「デヴィッド、あのとき父さんとわたしは決めたの、あんたの好きな人生を送らせてやろうって。だからあんたは、二番目の関所に行き当たっただけなのよ。わたしはもう一度同じことを言うわ……あんたのしたいことをしなさい。」

私がどうしても信じたかったあることを、母の言葉は私の心の中にしっかりと据えつけてくれた。それは、私にも自分の運命を選ぶ権利があるということだった。胸の嵐は治まったわけではなかったが前よりはよほど楽になった。結婚したい、人を愛したい、夫となり父親になりたい、という私の心の訴えに、お母さんはこう言ってくれた。「それは当然よ。みんな実現して当たりまえのことよ、おまえがそれをほんとうに望んでいるのなら。」それは父さんの人生にとっていちばん暗い日ではあった。だが父さんは、あの時、いちばん輝かしい日に通じる道を歩きだしたのだ——おまえという子の父親になる日に向かっ